

ピサからベニス 駅前旅館シリーズ（その二）

中学高校時代には国名とか地名とか鉄道だとかを競って覚えた。それは、この歳になっても役立つている。しかし、その後、相次いで国家が誕生したアフリカなどは完全にお手上げだ。欧州各国の国境線すらも、あやふやになりつつある。主要都市の相互関係が定かでないことが多い。イタリアもそうだった。



<http://www.hankyu-travel.com/italy/kankou/>

成田からミラノに飛び、そこで入国し、国内線でピサ空港に移り、レンタカーでホテル入りのだけけれど、白状すれば、ピサとミラノとローマとフィレンツェ（フロレンス）、それとベネチア（ベニス）の位置関係が今ひとつピンときていなかった。ピサに着き、地図を眺めて驚いた。

と言うのも、ピサは航空機も鉄道も完全に幹線から外れた場所で、しかも訪問先のイタリア・メーカーはフィレンツェ近郊にあり、毎日、ピサからレンタカーで通わなければならなかったからだ。ピサに宿泊する理由はまったくなかった。フィレンツェ泊にすれば良かった。何故、完全に他人任せで事前にまったくチェックしなかったのかと後悔した。しかし、文字通り、後の祭りだった。

次の宿泊地はベニス。このままだとフィレンツェを素通りしかねない。買い求めた旅行ガイドには、ピサの二〇倍近いページを使って「見どころ」などが説明されていた。有名なメデイチ家とルネサンス発祥の都市だ。ダビンチ、ミケランジェロなどの名前がゴロゴロと並んでいる。ここまで来たのに、しかも、連日、近くにま

で行っているのに、フィレンツェに行かない手はない。それにピサの家庭料理も悪くはないけれど、本場の「イタメシ」も食べてみたいと思った。

イタリア国鉄 (Ferrovie dello Stato FS)

で、時間を作ってフィレンツェに行った。ピサ駅で時刻表を調べたところ、イタリア国鉄に乗って、わずか一時間〜一時間半ほどの距離だ。しかも一時間に三〜五本ぐらい走っているの、時刻を気にする必要がない。乗りたかった列車にも乗れるし、言うことはない。



ヨーロッパ大陸で列車に乗るのは約三十年ぶりのことだ。ある調査のために各国を回った際、「ライン下り」のため、日曜日にライン川の上流の都市、コブレンツまでノコノコと出かけた以来のことだ。

ヨーロッパの鉄道事情は、いろいろ紹介され、相当に良くなったと聞いていた。それで「ユーロトンネル」を潜り抜けてみたい、「オリエント急行」に乗ってトルコまで行ってみたい。パリから「TGV」に乗って南フランスに行ってみたいなどと思うようになっていたので、その第一歩だという想いが込み上げてきた。

切符を買った。旅行ガイドには「ヨーロッパと日本の駅で一番違っているのは改札システム。ヨーロッパのほとんどの駅では改札口がなく、そのまま列車に乗り込むが、刻印機のあるところでは自分で必ずチケットに日付を刻印すること」「チケットの刻印を忘れると、不正乗車と見なされることもある。チケットの刻印機の奥まで差し込んで、音がしたら完了。抜き出したら、刻印されているか確かめること」などと書かれていた。

刻印機らしきものはあった。ところがチケットをいくら差し込んでも作動しない。壊れているらしい。何台かで試したけれど同じだった。やや焦った。しかし、地元の人たちが機械を使っている様子はない。同じように困った表情を浮かべているのは旅行者風の人たちだけだ。ほとんどの人が切符を買おうと、そのまま一直線にホームに向かう。それでホームに「本物」の刻印機が設置されているのかと思って、探しに行った。でも、それらしきものはなかった。観察していたら、そのまま乗り込む人がほとんどだった。

それで、意を決し、そのまま乗り込んだ。いずれ検札が回って来ると思った。しかし、それもなかった。車窓からの風景に見とれているうちに、列車はあつげなくフィレンツェ駅に着いた。狐につままれたようだった。



下車し、矢印に従って歩くと、旅行客風の人たちでごった返している広場に出た。フィレンツェは交通の要衝で、ここから各地に向けて列車が発発するらしい。ホームが何本も並んでいた。



ヨーロッパ主要都市を結ぶ超特急、最高時速約三〇〇キロのスマートな車体の「ユーロスター」(Eurostar)の姿もあった。しかし、似つかわしくなかった。イタリア鉄道と聞くと、暗くもの悲しい一九五六年のイタリア映画「鉄道員」と、その主題曲を思い出すからだ。「鉄道員」の撮影に使われたのはミラノ中央駅だそうだが、フィレンツェ駅もよく似ていた。モノクロなら、多分、区別できまい。一昔前の上野駅を彷彿させる駅だった。

ところが、「ユーロスター」の姿を見たのが災わざわいしたのだろう。もの悲しい雰囲気はどうしても漂ってこない。何よりもいただけないのはマクドナルドだ。ドンと赤い大きなマークを構内で誇らしげに掲げる。そこが若い男女で混み合っている。これではとても感傷な気分ひたに浸ることはできなかつた。

この雑踏を抜けると、もう駅の外、いきなりフィレンツェの街角に放り出されていた。改札口がないのだ。改札口に慣れ親しんでいる僕には、ケジメがないというか、シマりに掛けているというか、どうにも落ち着かなかつた。

メデイチ家とルネサンス

ピサのあるトスカナ州の州都がフィレンツェである。「花の都」という意味で、英語名はフローレンス。人口は約四十四万人で、ピサの四倍近い。ピサはアルノ川の河口近くの都市。フィレンツェは、その上流の丘陵と扇状地せんじょうちに立地している。中世後期からルネサンス期（十三〜十六世紀）にかけて、文学や美術の世界的中心地となり、その遺産を今日に伝える歴史・観光都市だ。

そしてフィレンツェと言えば、大富豪でルネサンスの保護者だったメデイチ家である。

メデイチ家の基礎は十四世紀のメデイチ	の立て役者がコジモ（一三八九〜一四六四年）。
銀行の設立で築かれた。その後、ヨーロッパ	ミラノ、ナポリとの友好関係を保つのが彼の
各地に支店を開設、戦費に窮する各国に貸付けを行い、巨万の富を蓄積する。政治的には	一貫した外交方針で、共和国の安定と繁栄に
表だつことを避け、財力と新興大商人層内での信望を武器に支持者脈網を確立。それによ	貢献し、死後「祖国の父」の称号を贈られた。
ってフィレンツェ共和国内で隠然たる影響	彼の孫ロレンツォ（二四四九〜九二年）は、
力を持つようになる。このメデイチ家の繁栄	市民ながら若い頃から他国の君公と対等に
	交わり、フィレンツェでも無冠の王のごとく
	君臨した。祖父の外交方針を継承し、イタリ

ア半島の諸勢力の均衡に努めた。賢明かつ豪

復帰が実現する。

胆で、「偉大なる者」という称号を与えられた。コジモ同様、芸術を保護し、自らも文学作品を残した。

だが、メデイチ家の後継者たちは、コジモ

一世（一五一九〜七四年）やフェルディナンド

一世（一五四九〜一六〇九年）を除くと、おお

むね凡庸で、一六〇〇年代初め、メデイチ銀

行は閉鎖を余儀なくされた。

そして後継者のいなかった奇行の主ジャ

メデイチ家はフィレンツェ共和国から追放される羽目に陥った。その後、復帰、追放を繰り返し、姻戚関係の皇帝などの後押しで、

ン・ガストーネ（一六七二〜一七三七年）の死

一五三〇年にメデイチ家のフィレンツェ再

により、トスカナ大公メデイチ家は絶えた。



メデイチ家については、だいたいこんな説明が行われている。このメデイチ家が収集・製作させた絵画や彫刻などが、フィレンツェのウフィッツイ美術館、ヴェッキオ宮殿、アカデミア美術館などの主な展示品になっている。

ここはひたすら歩くしかなかった。ラファエロ、ボッティチェッリ、レオナルド・ダ・ヴィンチ、ミケランジェロなど——写真集で見ると、実物を見ようとすると人混みでもみくちゃにされるのを覚悟するしかない——の作品が無造作に飾られ、ゆったりと好きだけ眺められたのは、好き嫌いとは別に、得がたい贅沢な時間だった。

もつとも白状すれば、階段の上り下りを含め、最後はフラフラだった。分厚い美術品などの解説書を片手に、スニーカーとリック姿の欧米人が闊歩する中では、休みみ見るのが精一杯の僕の姿は異様に映っただろう。でも、それが許されるのは嬉しかった。

フィレンツェのスパゲッティ

一目だけでも見たいというもので溢れていた。書物や写真だけで知っていたものが、行列などしなくても見られるのだから、自分自身はフラフラなのに、見るのを止められない。「また来ればいい」と呟きながらも足が動いてしまう。



そうこうしているうちに完全にエネルギー切れになった。足も言うことを聞かない。

ピサではありつかなかった本場の「イタメシ」を食べようと勇んで来たのに、結局、動き回った起点のシニョーリア広場のレストランに飛び込まざるを得なくなってしまった。

観光客のたまり場のような店だ。少し我慢すれば、旅行ガイドにあったレストランの美味い食事がありつけると思ったけれど、もう駄目だった。限界になると、突然、変身する。

「なんでもいい。ともかく食べ物をお口に入れ、休みたい」としか考えなくなる。ロバのように頑固になる。そして「海水浴場のラーメン」だと思いつながら、スニーカー姿の観光客と遠足で来ている子供たち、それと群がる鳩を見ながら、普通のスパゲッティを結構な値段を払って食べる羽目になってしまった。



救いは隣の老夫婦だった。話していた言葉はドイツ語だった。どうということのないスパゲッティを食べ、ワインを飲み本当に嬉しそうだった。その様子を見ていたら、「海水浴場のラーメン」のようなものだったけれど幸せな気分になった。

遠足で来ている子供たちも良かった。通りの反対側の壁の前に座り込み、持つてきたサンドウィッチを取りだし、それを頬張りながら、ふざけ始めた。そう言えば、あんな時代もあった。古今東西、贅沢を言えば切りがない。人間、気持ちの持ちよう次第——改めて、人生の楽しみ方を教えられたひとときだった。



書物でしか知らなかった多くの美術品を一度に眺める機会に恵まれた感想をあえて言わせてもらえば、「ルネッサンス」というものの凄さを思い知らされ、「ルネッサンス」|| 「文芸復興」とステレオタイプに思っていたことの意義を肌身で感じたということだった。

ルネッサンス——一四〜一六世紀、イタリアから西ヨーロッパに拡大した人間性解放をめざす文化革新運動。都市の発達と商業資本の興隆を背景として、個性・合理性・現世的欲求を求める反中世的精神運動が躍動した。この新しい近代的価値の創造が古代ギリシャ・ローマ文化の復興という形式をとったので、「再生」を意味するルネッサンスという言葉で表現された。文化革新は文学・美術・建築・自然科学など多方面にわたり西欧近代化の思想的源流となった。文芸復興（大辞林）

いくらこんな説明を聞いてもピンとこない——月並みだけれど、「百聞は一見にしかず」の世界だった。例えば、絵画。同じキリスト教の聖書の中の場面を題材にしても、それ以前のものとは、まるで違っていた。生々しい人間がキャンバスの中で、壁画の中で躍動していた。それ以前の既成観念と様式美に拘束されたものとは根本的に異なっていた。彫刻はもつと素晴らしかった。一気に、千年ぐらい前の自由奔放なギリシャ・ローマ時代に遡り、しかも、それを上回る躍動感に溢れ、人間の生を感じさせると同時に、物理的な大きさの点でも圧倒するものだった。

「チャパツ」や「ガングロ」といった「流行」^{はやり}ではない。もつと根元的な欲求に駆^かられたものだと感じた。当時の人たちが、これらを見て、どれほど大きな衝撃を受けたのかを思い、そして、そうしたものを認め、支援を惜しまなかったメデイチ家を代表とする富豪たちを想像し、改めて人間の複雑さと多様性について考えさせられた。

見たい、知りたい、わかりたい

つい先日、ブラツと本屋に立ち寄ったら、新刊書の棚に「ルネッサンスは何であったのか」(塩野七生著 新潮社 二〇〇一年四月)があつた。思わず買い求めたが、その第一部「フィレンツェで考える」には、概略、次のようなことが書かれていた。

約千年間、キリスト教会によって押さえ続けられてきた、見たい、知りたい、わかりたいという欲望の爆発が、後世の人々によつてルネッサンスと名付けられることになる精神運動の本質だ。欲望は爆発しただけではなく、様々な作品に結晶した。

創造するという行為は理解の本道である。考えているだけでは不十分で、それを口であろうとペンであろうと画筆であろうとノミであろうと、表現してはじめて知識なり理解になる。

ルネッサンス時代とは、要するに、見たい知りたいわかりたい、と望んだ人間が、それ以前の時代とに比べれば爆発的としてもよいくらいに輩出した時代だ。見たい知りたいわかりたいと思つて勉強したり制作したりしているうちに、ごく自然な成り行きで多数の傑作が誕生した、と言つてもよい。

キリストの教で最も重要なことは「信ずる者は救われる」で、疑いを持つことは許されなかつた。ラテン語による説教を聴かされた庶民は、ラテン語の祈りを機械的に暗唱していただけで、その意味するところまで考えることはできなかつた。

聖書という教典を読み一般に説き聞かせる聖職者階級が、その組織自体の強化・存続を狙うのは不思議ではない。それは人間の性^{さが}である。そのため罰則を強化し、地獄の存在を強調するなどして脅した。

それを裏打ちしたのが、「コンスタンチヌスの寄進状」だつた。キリスト教を国教にしたローマ帝国の皇帝、コンスタンチヌス大帝がローマ帝国の西半分、つまり後代のヨーロッパの地をローマ法王に寄進したとされるものである。

これは後にコンスタンチヌス大帝の生き

た四世紀のものではない、十一世紀になって偽造されたものだと見破られたが、中世の間、ずっと信じられ、土地の正当な所有権はずべてキリスト教会にある——土地は、所有主と

いえども教会から借りているにすぎず、所有権の存続を認めるか否かも、キリスト教会に決定権があるという主張の拠り所となった。

そして中世の人々は、キリスト教会という羊飼いの後に従う従順な羊となった。

ルネサンスの勃興と十字軍とは切り離せない。一二七〇年に最後の十字軍が敗北したが、それまでにイタリアの海洋都市国家は大きな十字軍特需の恩恵を受けた。そこから天引税で自然に大金を手にすることができたローマ法王庁の金の運用を請け負うフィレンツェも繁栄した。経済的繁栄を背景に、学問に対する投資も活発化し、十字軍の遠征に伴って流入した異文化の共有化、体系化も急速に進められた。

「人間ならば誰にでも、現実のすべてが見え

こんな説明が、以前と比べると、ずっと興味深く読めるようになった。これは、フィレンツェ訪問の一つの収穫だろう。

この脈絡で考えると、ヴェッキオ宮殿にあった「地図の間」の意義も分かりやすい。巨大な鉄製の地球儀が部屋の真ん中に置かれ、壁面は世界各地の地図で埋まっていた。一五八〇年代のものだという。アジアの地図もあった。東南アジアなどは、今のものと同様であり、すぐに判別がついた。それに比べると、日本に対する知識はまだ乏しかった。一つの島として描かれていた。いわゆる「東西軸一島型」と呼ばれるものだった（「地図の文化史」海野一隆著 八坂書房 一九九六年）。

るわけではない。多くは人は、見たいと欲する現実しか見ていない」（ユリウス・カエサル）

既成概念の呪縛から解放されれば、地中から姿を現した古代ギリシャ・ローマの壁画や彫刻のすばらしさを理解できないはずはない。身の回りに古代ギリシャ・ローマ時代の遺物や遺跡に溢れていた。いまわしい邪教の遺物として排斥されてきたものが大金に化ける時代になった。誰もが発掘に乗り出した。それらを目にした人たちがどれだけ驚いたかは想像にかたたくない。

一四五五年のグーテンベルグによる活版印刷技術の発明は、聖職者が知識を独占する時代の終焉を告げるものだった。判断を下すのに必要不可欠なもろもろの知識が一般に広く普及するようになった。ルネサンスは出版業に言及することなく語れない。

……………



大地が球体であることを最初に唱えたのはピタゴラス（前六世紀）で、地球の全周を最初に測定したのはエラトステネス（前二七三〜前一九二年頃）。そして「地理学入門」を著した紀元二世紀のアレクサンドリアの天文学者プトレマイオスは、ヨーロッパからインド、そして北アフリカをカバーする、いま見てもそうおかしくない世界地図を作った。

ところが、こうした知識はイスラム諸国に伝承され、ヨーロッパはキリスト教的世界観に支配されてしまった。ごく一部の知識階級は球体だということを知ってはいたけれど、大部分は聖書の記載や神話・伝説に縛られていた。「地上楽園」などが描かれた地図がまかり通っていた。こうした世界観がうち砕かれ、再び現実を直視する方向に向かわせたのもルネサンスだった。

コロンブス（イタリアの航海者。ジェノヴァの生れ。スペイン女王イサベルの援助を得て、一四九二年アジアに向かってスペインのパロスを出発、西インド諸島サルバドルに上陸、キューバ・ハイチに到達）が登場する背景があった。

ヴェッキオ宮殿の「地図の間」いると、四方の壁の世界地図と中央の地球儀を眺めながら、当時の知識人たちが興奮しながら世界を語っているのが聞こえてくるようだった。（つづく）